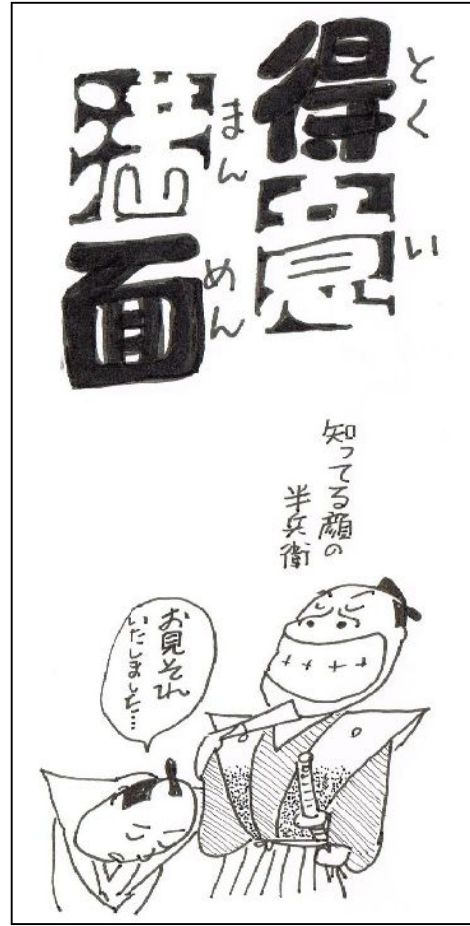


先週の回答



のどかな春の陽射しが、山田藩五万三千石の江戸上屋敷の厠の壁にふり注いでいる。

「半兵衛殿、ここだけの話でござるが」と納戸約の村上錦之介が、小用を足している片桐半兵衛の横に立って声をひそめ、

「今朝方、殿が身罷りましたぞ」と呟いた。

「らしいな」「ご存知でしたか。さすがは片桐殿」と恐縮して身体を上下に小さくゆすって錦之介はさすがごと手洗から出て行った。

片桐半兵衛。四十三歳。勘定組組頭。この男、知ってる顔の半兵衛の異名を

持っている。「ええー、ほんと」とか、知らなかった」とか「聞いたことない」は恥とするのが片桐家代々の家訓である。

一日の勤めを終えて、下僕を従えて下城の途中、北の御門前の広場にさしかかると、右筆役の松方広之進が左右をうかがいながら半兵衛の袖を引いて、耳許に小声で、

「城中に不穏な空気が流れております」と告げた。

「そのようだな」と得意のわかってる顔で半兵衛は頷いた。

「お気づきでしたか、これは失礼つかまつた。すると城代家老の山田帯刀殿が松千代君を跡継ぎに推し、筆頭家老の本土佐守殿が竹千代君を推挙して対立

している」

「らしいな」存じておるの得意顔。

広之進は鼻白んで「お時間を取らせ申した」と一礼した。

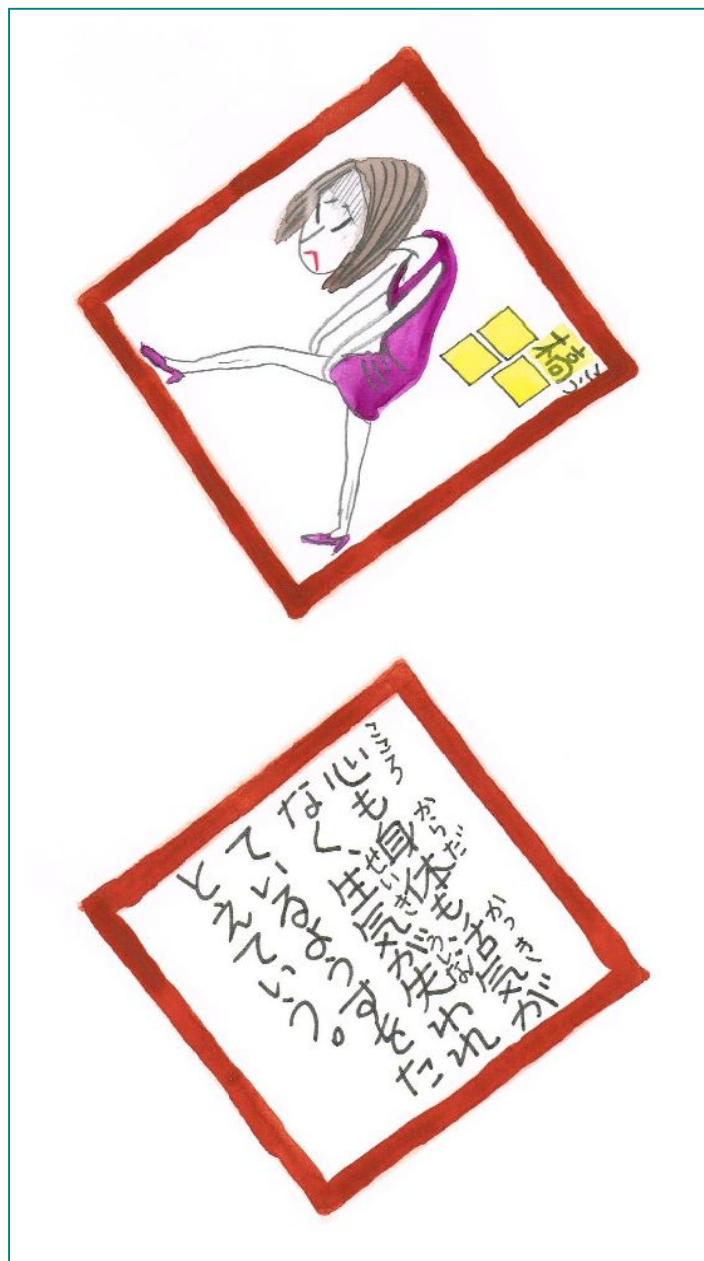
役宅に帰り、夕餉の後の茶を自室に寛いで飲みながら、一日をふり返り、今日も物知り顔で通した満足感に浸っていると、音もなく襖が開いて、下女のとよ（十八歳）が、やや固い表情で上目遣いに、

「旦那様、あたいのお腹の子の責任はどう取ってくださるんですか、いますか」と語尾に力を込めて見つめた。

「何の話？」と半兵衛は、知らぬ顔の半兵衛を決め込んだ。



今週の問題



□の中に漢字を埋めて
四字熟語を完成させてください。